

『およぎ』の史的記述に関する考察

城 後 豊*

(平成2年10月31日受理)

要 旨

『およぎ』の起源は、有史以前からと言われている。しかし、およぎの史実考証に基づく報告は数少く“どのような経過をたどり今日の「水泳」が成り立ってきたか”ははっきりしないところがある。特に、生活の中でのおよぎが“どのような意味を持ち、その活動はどうであったのか”などの関連について曖昧なことが多い。

そこで、本小論では、わが国における『およぎ』にかかわる記述を史的に調査し、その原義を講究することにより、生活の中における「水泳」の形成過程について若干の資料を得ることにした。

KEY WORDS

<i>Oyogi</i>	およぎ	Swimming Practice	水練
Purification	みそぎ	Swimming Races	競泳
Ablution	沐浴	Swimming	水泳

は じ め に

『およぎ』は、日常の生活と深い関わりを持っている。特に、四面環海の国々では、漁撈に携わる人々が採捕のために水中を自由自在に移動し、およぎの技術を発展させ、生活に潤いを与えてきた⁽³⁶⁾⁽⁴⁰⁾⁽⁵²⁾⁽⁵³⁾。また、およぎの技術は⁽³⁾、水との関わりの中で身体を洗い清めるための神事的儀式や軍事訓練、水難救助、身体鍛錬などに活用されてきた。その後、海底の動物や貝を採集するための潜りや泳ぎなどが潜水競争やスピードを競う競泳となり、ものを運搬していたサーフボードも波乗り競争として遊びやスポーツとしての内容を徐々に整えてきた⁽¹⁾。さらに、わが国には、独自に発展してきた日本泳法⁽⁵⁶⁾があり、各泳法の基礎として貢献してきた。いずれもが、生活を基盤におよぎの技術を伝播しながら水泳の発展を遂げてきている。したがって、これらは生活の中で水泳術を抱蔵し、水泳の文化的な技法を創出してきた。

そこで、本小論では「およぎ」の記述に着目し、わが国における古代から現代までのおよぎにかかわる原義を講究し、生活術としての水泳について若干の資料を得た。

* 学校教育学部附属実技教育研究センター

I

まず、わが国における「およぎ」が、どのような歴史的経過の中で、今日の「水泳へ」と伝播してきたか、その史的記述を挙げてみる。

①濯（ススグ）と滌身・禊（ミソギ）

生活の中では、初歩的なおよぎの動作は水と戯れることから始まる。たとえば、水を手ですくって体に「漱」いだり、「洒」いだりする。古代においても「濯（すすぐ）行為」や「禊（みそぎ）場面」が散見できる⁽²⁵⁾。古事記の序上巻に「潜キテススギタマウ・水底ニススギタマウトキ・水ノ上ニススギタマウ」と全身をすすぎながら水につかり、深水にて潜水し、水上にてすすぐ動作の表現がある。同様に日本書紀巻第一神代には、沈濯（シズミススグ）潜濯（カツキススグ）浮濯（ウキススグ）などの表記がみられる。いずれも水中におけるすすぐ段階の動作が示されている。

さらに、伊邪那岐尊の橘の小門の阿波岐原に於けるみそぎ行為が、次のように記載されている⁽³⁵⁾⁽⁴⁴⁾⁽⁵⁸⁾。

「但親見=泉国-。比概不詳。故欲濯=除其穢惡-。乃往見=粟門及速吸名門-。然比二門潮概太急。故還=向於橘之小門-。而拔濯。」（日本書紀第十ノ一）

「遂將湯滌身之所汚-。乃興言曰。上瀬是太疾。下瀬是太弱。便濯=之中瀬-也。」

（日本書紀 巻第一 神社上）

いずれも「濯」や「滌身」の場面では、潮の流れを観察して緩急を慎重に選定し、みそぎの順序と場所が決められている。これこそ疑義の押しむべき余地の無いおよぎの事蹟と言われ⁽³²⁾、神事儀式と密接に関連したおよぎの初見として注目すべきものがある。

これらは、身体を洗う意味ばかりでなく、水を注いで心身の汚れをとりさるなどの行為が水中で行われ、初歩的なおよぎの動作が随伴していた。同様に、「ミソギ」は、水辺にでて水で体を洗い清め、悪を払い除き祭ることであり、一般には神事的行事としての意味がある。が、おそらくこの業は、およぎの技術なしに行うことはできなかったであろう。

②沐浴（モクヨク）と沐み・川浴・游浴（カワアミ）

さらに、神事的・宗教的儀式として様々な水中動作がある⁽³³⁾。たとえば、沐浴やかかわみなどである。

今でもインドの神聖ガンジス川のほとりでは、ガード（もく浴場）の石段の上で神に祈る沐浴の行儀が行われている⁽⁴⁶⁾⁽⁴⁷⁾。これら「沐浴」や「カワアミ」は、神仏修行の一環としていずれも水浴びもしくは川で水浴することであり。わが国では、最も古いものに古事記（712年）の中巻日本武尊出雲討伐の御事に「建をさそい肥河に共に沐みせられた……」⁽⁴⁾⁽³⁴⁾⁽⁴³⁾とある。また日本書紀（720年）崇神天皇六十年秋七月の出来事に兄出雲振根飯入根の事件に“願浴=共游沐-”⁽¹⁷⁾とある。いずれも川の中で泳ぎながら討伐や謀殺が試みられたと言い伝えられている⁽²⁶⁾。ところで、「游」については水上に浮かんで且つ移行することであり、いわゆる「浮び行く」の義として捉えた方が妥当であるが、一般的にアソブの意味があり、游の表記があるから即断し

て泳いだとはいえない面もある。すなわち、古代におけるかわあみもみそぎと同様に神事的用語として代用され、付随的におよぎの動作があったと解釈できる。たとえば、江戸時代の嬉遊覧(喜多村新節著)⁽¹⁷⁾には、水あぶることをかわあみとっていることから、およぎの行為があったことは回避できない。

③迦豆枝・潜（カズキ）

ところで、およぎは水中に潜ることが不可避となる。古事記上巻に「迦豆伎而」⁽¹³⁾とか、日本書紀に「潜滌之時」⁽⁵¹⁾とある。つまり、カズキは、潜り泳ぎの意味をもち「潜（かずき）」すなわち水中に潜ることである。また、水中にもぐって魚介などを取る女性を「潜女（かずきめ）」といい、いまでも頭から水を被る「被く（カズク）」などの行為が残っている。さらに、海人たちの裸潜水漁⁽⁵⁴⁾として「——水深浅と無く、皆沈没して之を取る。——魏志倭人伝の記事（大林太良ほか、海人の伝統より、1987年）」といったもぐりの見聞があり、潜とおよぎの動作がともなっていたことは言うまでもない。

さらに、およぎの動作にかかわる表記がある⁽⁴⁵⁾。

「伊勢のあまの朝な夕な潜くとふあわびのかいの」（万葉集 11）

「近江の海に潜せな」（古事記中巻記中）

いずれも生活事象の中のもぐり動作が表現されている。

また、潜は、日本泳法の伝統を守っている鹿児島県の神統流（17世紀）⁽⁵⁷⁾の中に“潜参段”として上潜、中潜、底潜の業があり、もぐる（むぐる）とかくぐる技法がある。なお、鎌倉時代の「カツギ衆」⁽³⁹⁾や現在の海女言葉の中に「岡かつぎや沖かつぎ」⁽³⁸⁾などが使用されており、神事的行事や漁撈の方法⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾であった“潜の業”が生活を支え、そのおよぎが武芸になった史実といえよう。

II

およぎは、水遊び道具の開発・工夫や泳ぎの上達を助けるための手具などにより一層楽しいものになる。また、技術向上の動作が段階をおって明確であれば意欲が湧いてくる。

ところで、平安時代までは、およぎを「おふす」⁽¹⁴⁾と言い、およぐと共に浮かぶ意味に用いたようである。わが国最初の分類体漢和辞書の倭名類集抄（931-938年）に「拍浮。——俗云於布須是也（倭名抄 4）」の記述がある。また、仁徳紀（764-938年）の中に全匏（オフシヒサゴ）が記されている⁽¹⁶⁾。おふすとは、水に浮かぶことであり、ひさごとは、ユウガオ、ヒョウタン、トウガンなどの総称であり、中をくり抜いて水をくみ入れたりする容器として使用されているものである。たとえば、匏船（ひさごぶね）といわれるように船の浮力を増すためにつけた用具として活用されていた。この様に、ひさごなどもオフス（およぎ）を楽しむ浮袋として利用していたようである。

さらに「およぐ」⁽¹⁵⁾は平安期の物語の中に多く散見できる。

「いさごの浪をうちおよぎ悲しき島につきにけり」（宇津保物語 菊宴 10世紀後半）

「池におよぐいを山に鳴く鹿」（源氏物語手習いの巻 11世紀初頭）

「片手ヲ似テ子ヲ提ゲテ片手ヲ以テ游ギヲ擧キテ岸ザマに来テ」（今昔物語十九）

鎌倉時代の説話集古今著聞集（1254年）には、およぎの形態が出てくる。

「引ちぎりてぬぎておよぎ上りたりけりき」(九・十二)

「其後はだかにてをよぎ上りけり」(十・十四)

また、遠泳にも似た表現がある。

「しばしありてとうらみよりいできぬ。をよぎてくがざまにのぼりいて。」

(宇治拾遺，虎のわにをとる事，13世紀初頭)

この時代は、およぎ方が表現され、実際の生活の中に様々なおよぎが生まれてきている。いわゆる水中動作のともなった「およぎの形」がはっきりしてくる。

III

一方、武士の世の中になるとおよぎは、戦術としての技法として発展してくる⁽¹⁾。とくに、「水練」は、およぎの達人や上達をめざした武芸の手段として盛んになってくる。

「究意（くつきよう）の水練にておはしければ」(平家物語 11)

「ゆゆしきこと也ける水練なりとり」(古今著聞集)

「鹿島与一として無雙の水練ありけり」(源平盛衰記)

「それは必定水練をいれて」(最明寺殿百人上臈)

「飯田次郎相=当御堂宿正=衣=為=水練者=」(東鑑)

など⁽²¹⁾、いわゆる武術及び武勇伝の中におよぎの進歩がみられる⁽⁵⁾⁽²⁷⁾。これら武家社会では、敵を仮想した実用的な水練術が重視され、戦国時代を経て徳川末期には各日本泳法の流派を基に水練が盛んに行われた⁽⁹⁾。さらに、水練の必要性はアメリカ艦隊の来航が引金となり洋式兵学と共に武芸四芸(砲術、兵学、水練、柔術)の中に組み入れられる。だが、各藩の流派⁽²⁾⁽¹¹⁾を中心に流儀の秘伝として秘密裡に伝承されていくことになる。

IV

さらに、およぎは、武道としての色彩を濃くしてくる。その過程では、およぎ記述の理念が明確になってくる。たとえば、「游」⁽¹⁸⁾は、「習=水善=游」「浮かび行く事、流れ渡りする儀」となり、本朝通鑑、四四、土御門帝元久元年九条に「自説=御衣=游泳」とある。そして「游ハ浮行ナリ、泳ハ潜行ナリ」と比較している。その後、昭和初期には「水があれ場所そ泳ぎがあり、水を冠らせて水泳とはどうかと思う」と批判し、游の原義を正当化した時代がある。史実記述の概念とおよぎの技術が一体となり、游は「游泳」として江戸末期から昭和初頭まで多く使用されてくる。

一方、「泳」⁽¹⁹⁾は、水中の潜行を意味していた。たとえば、「不=可=泳思=、泳=之=游之=。(詩経漢之広三矣)」とある。また、泳とはミズクグリと読む場合もあり、泳之宮(クグリノミヤ)といった社も存在していた。さらに、「川上ヨリ阿武隈川ヲ流泳ニシテ(藤葉盛衰記)」とある⁽³⁰⁾。だが、文政13年(1830年)嬉遊笑覧の水練の項に游泳を説いて「泳とは異他」として区別している。

ところで、水泳は、江戸時代の職員録武鑑(1647年)などに水練の世話役として位置づき、

通俗的に用いられていた。その後、当時講武所（1855 年）の布達武術としておよぎも「水泳」と称したことが初まりである。むしろ水泳は大正以後に多く記述してある。しかし、先述したように戦時中の海軍などは、およぎの程度の低い者を「水泳下手」と表現し、武術としての技量を持った者を「游泳上手」として定義づけている⁽²²⁾。いわゆる、武士道としての見解や流派を中心とした水術、泅道、武術としての游泳であり⁽²⁰⁾、水泳は単なるおよぎとして低俗なおよぎであり、文化的内容としての価値を明確にしなかった。これは、精神道としての概念⁽²³⁾が強調され、「水泳」としての定義が包括できなかったともとれる。

V

さて、およぎが形態的にも機能的にも整ってくると“競技”⁽²⁴⁾⁽²⁸⁾としての性格をおびてくる。いわゆる「競泳」の台頭である。競泳は、19 世紀後半の近代泳法の開発と共に競技として発展してくる。しかし、明治時代までは武術としての水練が中心であり、競泳は重視されない傾向にあった。江戸時代では、「およぎくらべ」「水くらべ」「せり水(急游)」⁽⁴⁸⁾などの場面がみられるが、何れも武術の業の表現であり、競い合はなかった。そこでは、各流派の水術は公開せず秘密戦術のおよぎであり、競泳が目的ではなかった。

ところが、武士の時代が終わり、新しい時代となった明治 32 年（1899 年）横浜で水府流太田派對アマチュア・ローイング・クラブによる横浜競泳会が行われた。この「内外競泳会」のようすが風俗画報（196 号明治 32 年 9 月）にプログラムと下記のようなポスターが掲示された⁽²⁴⁾⁽³⁰⁾⁽⁴⁹⁾。

Yokohama Amateur Rowing Club

Swimming Races

versus

The Suifuryu

Otaha Dai Nippon Yueijo

Saturday, August 13th, 1898, at 4 P.M.

いわゆる“Swimming Race”と表記され、「競泳」の記述が初めて使用された。その後、国内試合や対外試合が盛んとなり、競泳大会は大正初期以降各地で開催され、水泳の普及と共に水泳の大衆化に拍車がかかった。

VI

以上、「およぎ」は、古代より平安・鎌倉期を経て漁撈および神事や武術の業が様々な生活との絡みの中で育まれてきた。時には生活術としてのおよぎが闘いのための戦術として強化されたり、隆盛時の水軍や海賊及び武家社会では水練の必要性が強制された。さらに、江戸時代後期の各藩の流派は、多くの泳法を創出し、今日の泳ぎの基礎となし水泳の発展に多く貢献してきた。

その後、明治時代では、欧米文化による近代化の波が各種泳法のおよぎを導入し、大会を通

じて交流が一段と盛んとなり、競泳としておよぎが競われるようになった。また、近代における工業化は、各地に海水浴場の開発や水泳場の建設を盛んとし、余暇活動や医療活動としての泳ぎが認められてきた。これらの施設は、生活の中でのおよぎの価値を多様化させ、レジャー水泳として歩み始めた。一方では、軍部を中心に戦術⁽⁶⁾を目的としたおよぎの技術向上を展開した。そこでは、精神論を強調するあまり武力行使や戦争への意識向上のため武功談として、強引な指導や方法を残す結果を生み出した⁽⁶⁾。

戦後は、国体やオリンピックを中心とした競技スポーツの交流を推進し、エイジグループを主とした競泳が盛んになってくる。しかし、一方では、勝敗にこだわり記録至上主義の競泳に力を注ぎ過ぎた面もあった。その後、余暇活動を中心にした“レジャー化の波”はスイミングクラブの隆盛やマリンスポーツ・アクアスポーツといった楽しみの多い水泳スポーツを生み出してきている。だが、およぎが商業主義に左右され、退廃的な水泳文化に浸りきった現象がある。これらの活動には目にあまるものがあり、社会問題化しつつある。

これらの現状は、あらためて“生活術としての水泳とはなにか”に注視することが肝要となる。

VII

さて、加藤摩河蛙によれば「swimmingは、1066年ノルマン征服前の英語たるアングロ・サクソンの“swiman”より出たもののようであるが、尚、ゲルマンの一種たるゴート族の言葉“swumfsl”と大きい関係を持つものである。swumfslとは、池とか沼とかすなわちプールを意味する言葉である。——（オヨギ三昧、1942年）」⁽³¹⁾と述べ、“swimming”の原義を考究している。さらに、水泳は、水の存在に始まり、水をためる人工池の発達が進み、水泳場が作られ、競泳のできるプールができ、その結果、およぎの技術が向上し、盛んになってきたと力説している。

また、水泳の解釈について次のような捉え方がある。

「水泳は、水中において身体を自由に操縦し得る技術を習得せしめると共に、心身を鍛錬し、健康を増進せしめるものである。（文部省、水泳指針、1928年）」

さらに、池田尚康は水泳十講（1930年）⁽⁷⁾の中で、“水泳は姿勢の矯正・筋骨の均斉なる発達・生理機能の促進を図る体育的水泳、護身及び人命救助としての実用的な水泳、運動のフォームより起こる美を中心とする芸術的な水泳、他人と対称として、泳法に、飛び込みに、その優劣を競いあるいは一定の距離において速力を競い競技そのものより起こる興味を中心として努力する競泳的な水泳がある”としている。

また、斎藤六衛は、水泳術の立場から次のように述べている。

「水泳術とは、あらゆる変化に対して他の何物にも頼らずして最も安全に身体を護る術なり。いかなる水の変化に際しても赤手能し、その危険より免るる術である。その極致は、水身一致にある。（水泳術、1932年）」⁽⁵⁵⁾

このように、戦前の水泳通史の中でも「およぎ」の定義は様々である。

次に、現在の水泳概念の主なものを挙げてみる⁽²⁾⁽³⁷⁾⁽⁵⁰⁾⁽⁵⁹⁾。

「水中を泳ぐこと。水およぎ。また、俗に競泳をいう。（広辞苑）」

「人間もしくは、動物が水面上にからだの一部を出すか、水面下を自力で進んだり、一定の体位を保って水面にとどまることをいう。(水泳指導教本, 1983 年)」

「スイミング (swimming) 水泳競技, 競泳, 飛び込み, 水球, シンクロナイズド・スイミングの4種目からなるが, 一般に競泳と飛び込みを水泳競技と呼ぶ。(最新スポーツ大辞典, 1985 年)」

「背の立たないほどの水中を移動する方法で, 生活術として生まれた。(スポーツ大事典, 1987 年)」

いずれも競泳的およぎの解釈と生活的およぎの解釈にとどまっている⁽¹²⁾。

ところで, 本小論では, これらの史実講究の結果, 「水泳」を次のようにまとめることができる。

“水泳は, あらゆる生活の場で, 水と安全に楽しくつき合う方法技術であり, 自力による水中での身体表現の全てである。さらに, 心身の健康を増進させる身体活動でもある。”

いわゆる“生活術”としての水泳の存在である。

お わ り に

本小論では, およぎに関わる史的記述より, 水泳の発達について概観してきた。その結果, 水泳技術の発達の全貌を再認識すると共に, 次の知見を得た。

わが国のおよぎの発展は, 次の五つに分類できる。

- ①神事的儀式中でのおよぎ
- ②漁撈の民としてのおよぎ
- ③生活の中で楽しむおよぎ
- ④武術のためのおよぎ
- ⑤競技としてのおよぎ

さらに, いずれものおよぎが, 水 (Aqua) という環境の中から創出された水中運動 (Aquatics exercise) であり, 人々の暮しと切り放すことのできない存在であった。なお, 水泳は, 生活スポーツとして “Swim for Fitness” また “Swim for Wellness” ——健康の維持増進のためのおよぎ——を身につけていくことにある。

注

- 1) 武士の世の中になると武功としての「水練」が盛んとなり, 武芸十八般の中で重要な位置を示し, 武士のたしなみとして発展してきた。しかし, 「一足二水三胆」と言われながらも, 武芸なみに扱われたのは享保以後である。また, 水泳の流派や藩主ひいては將軍の熱達度によって軽輩の業でなくなることもあった。
- 2) THE NEW ENCYCLOPEDIA OF SPORTS (1947 年) には, 次の解説がある。
Swimming is man's only means of navigating the waters, via muscular power alone.
The word “swimming” is derived from the old English of “swimming”,
いずれも, 水泳という言葉は, 英語の Swimming, ドイム語の Secwimmen, フランス語

の Anotation と同様に使われている。

参考・引用文献

- (1) 秋道智弥, 海人の民族学, NHK ブック, 1988, pp. 65-68.
- (2) 藤井甚太郎ほか, 明治文化史 1, 洋々社, 1955, p. 580
- (3) 平野豊, 国防遊泳教本, 大日本教化図書, 1943, p. 2.
- (4) _____, pp. 3-4.
- (5) _____, p. 6.
- (6) _____, p. 13.
- (7) 池田尚康, 水泳十講, 体育連盟出版部, 1930, pp. 2-3.
- (8) _____, p. 36.
- (9) _____, pp. 39-40.
- (10) 石川芳雄, 日本水泳史, 米山弘, 1960, p. 2.
- (11) _____, p. 4.
- (12) _____, p. 5.
- (13) _____, p. 13.
- (14) _____, p. 14.
- (15) _____, p. 15.
- (16) _____, p. 16.
- (17) _____, p. 17.
- (18) _____, p. 18.
- (19) _____, p. 19.
- (20) _____, p. 20.
- (21) _____, p. 21.
- (22) _____, p. 22.
- (23) _____, p. 23.
- (24) _____, p. 24-25.
- (25) _____, pp. 47-48.
- (26) _____, p. 60.
- (27) _____, p. 64.
- (28) _____, pp. 117-118.
- (29) _____, p. 119.
- (30) 加藤摩河蛙, オヨギ三昧, 白馬書房, 1942, p. 23.
- (31) _____, pp. 95-96.
- (32) _____, p. 142.
- (33) _____, p. 163.
- (34) _____, pp. 216-217.
- (35) _____, p. 219.
- (36) 木村毅, 日本スポーツ文化史, ベースボール・マガジン社, 1978, pp. 163-173.

- (37) 岸野雄三ほか, 最新スポーツ大事典, 大衆館書店, 1987, p. 460.
- (38) 牧田茂, 海の民族学, 岩崎美術社, 1980, p. 44.
- (39) _____, p. 165.
- (40) 最上考敬, 原始魚法の民族, 岩崎美術社, 1967, p. 165.
- (41) 森浩一, 技術と民族, 小学館, 1985, pp. 469-470.
- (42) _____, p. 590.
- (43) 本居宣長, (本居豊穎ほか校訂者), 校訂古事記伝, 古川弘文館, p. 1396.
- (44) _____, p. 1397.
- (45) _____, p. 1622.
- (46) 中村元, ヒンドー教史, 山川出版社, 1979, p. 40.
- (47) _____, pp. 88-96.
- (48) 日本水泳連盟, 水泳四十年史, 日本水泳連盟, 1969, p. 9.
- (49) _____, p. 10.
- (50) 日本水泳連盟, 水泳指導教本, 大衆館書店, 1983, p. 9.
- (51) 大林太良ほか, 海の伝統, 中央公論社, 1987, pp. 297-298.
- (52) 大林太良, 山の民と海人, 小学館, 1978, pp. 11-28.
- (53) _____, p. 277.
- (54) _____, pp. 299-300.
- (55) 斎藤六衛, 水泳術, 玄洋社, 1937, pp. 3-4.
- (56) _____, 白山源三郎ほか, 日本泳法, 日貿出版社, 1975, pp. 20-21.
- (57) _____, p. 169.
- (58) 山本三生, 世界聖典全集古事記神代卷, 改造社, 1929, p. 52.
- (59) 湯村久治ほか, 最新スポーツ大辞典, 国書刊行会, 1985, p. 475.

A Study on the historical description of Swim

Yutaka JOGO

ABSTRACT

The way how Swim developed in the Japanese history is obscure and there are few reports with historical consideration on this matter.

In this study, I investigated the historical description of Swim and the original meaning of Swim in Japan, then got following material.

Swim is divided into five types in the Japanese history.

- ① Swim of a divine ceremony.
- ② Swim to rescue pelagic fishermen.
- ③ Swim to enjoy the life.
- ④ Swim of practical military arts.
- ⑤ Swim for aquatic sports.

All these kinds of Swim are aquatic exercise. It is greatly important to note "Swim for Fitness" and "Swim for Wellness" as sports of the usual life.